

富山県の基礎日本語教室の体制整備に向けて

トヤマ・ヤポニカ 神初奈津子

1. はじめに

富山県は、外国人住民数が総人口比 2.2% (R6 年 1 月 1 日現在) の外国人散在地域である。システム図でいう右円の対話教室が郡部に 7 つあり、ボランティア支援者と外国人参加者との協働の場となっている。左円の基礎日本語教室は、中心部である富山市と郡部 3 市 (対話教室の横) に設置されており、両円が小規模ながら一定整っているように見える。しかし、実態は両円とも整備の途上で、中長期的な視野での体制整備が必要である。今回はまず、より緊急性の高い左円について課題を設定し、実践を試みた。

2. 課題とその背景、及び実践

課題 1 授業時間の不足と、それによるレベル別クラス間の連携の悪さの改善

背景 学習者数にかかわらず、対話教室のある地域に極力基礎教室を設置してきたことで、予算(授業時間数)や教師等のリソースが広く薄く分散された。その結果、1 教室(コース)に配分できる授業時間数が少なくなり、学習者が多い教室であっても、レベル別のコースを通年で設置できていなかった。

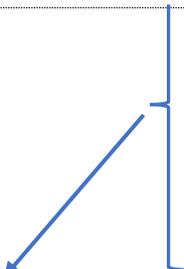
実践 富山市の教室 (以下、富山教室) をモデル教室と位置づけ、学習者の少ない教室のリソースをモデル教室に一定集約して、複数のコースを通年で行えるよう検討した。

課題 2 新しい評価基準の作成・実施

背景 前年度事業を振り返って、プログラム、学習者、講師、主催者に対するの評価ができておらず、次年度の改善に生かすことができていなかった。また、常に学習者の参加人数のみを評価指標にする主催者 (行政機関) に対する妥当な説明としての評価も模索すべきだと思った。

実践 モデル教室である富山教室で、以下の実践を行った。

実施内容	実施後の検討事項
2024 年 10 月 【評価指標の作成①】	
<コース開始前> ・ Can-do リストの作成 (自己評価) ・ インタビュー (学習者からのコース評価) の作成	・ 教室の様子、インタビューをビデオ撮影し、自治体への説明資料、また広報として使用してはどうか。 ・ 母語でのインタビューは、ワンストップ相談センターの通訳を利用してはどうか。 ⇒日曜日は利用不可で断念。
2024 年 11 月 【評価の実施①】	
<コース実施中> ・ 教室活動のビデオ撮影	・ コース終了時に「何ができるようになったか」を講師も学習者も確認できるよ

	<p>う、他者評価である口頭テストを実施してはどうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各コース、事業全体を振り返って改善し、行政機関に説明するため、事業評価（プログラム評価）を実施してはどうか。
2025年1月～3月【評価指標の作成と評価に向けて②】	
<p><コース終了後></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習者による Can-do リストの記入 (自己評価) ・インタビュー実施（通訳を介して） ・口頭テストの作成、実施（他者評価） ・事業評価の作成（※言語教育可視化テンプレートを参考に） 	<ul style="list-style-type: none"> ・教室担当教師に Can-do リスト、口頭テストの作成を依頼するのは、講師にとって負担が大きいのではないか。 ・事業評価は、R7 度以降全教室で実施できそうだ。

※松下達彦， 札野寛子（編）（2024）「言語教育プログラムを可視化するーよりよいプログラム運営のためにー」 凡人社より

3. 地域日本語教育コーディネーターとしての役割

- ・ゼロから日本語を学習し始める学習者が、最低 A1 終了レベル程度までの学習時間（100 時間程度）が確保できるように、総括コーディネーターと検討を重ね、基礎教室を設置した。
- ・事業を振り返って、事業の改善と自治体への説明資料として、教室担当講師と共に評価指標について検討し、実施した。評価については、自己評価としての Can-do リスト、教師評価としての口頭テスト、学習者からの評価としてのインタビューを作成、実施した。

4. 地域日本語教育コーディネーターとして、自身が大切にしたい視点と今後の展望

①地域コミュニティ等との連携

- ・地域社会との連携を強化し支援者、行政、日本語教育専門家との協働を進める。
- ・学習者が地域社会に参加するきっかけとなる場作り、環境を整える。
- ・ホスト社会側（日本人）への変容を促す教育の実践。
- ・行政への啓発（日本語教育の促進や事業評価の視点など）と連携。

②学習者の自己実現のサポート

- ・学習者が自己実現（仕事、進学、地域活動への参加等）できるよう、日本語支援だけに留まらず、必要な支援の場作りとサポートの実践。

↓

遠大な目標としての「日本人も外国人も、みんなが『住みやすい富山』、『住みたい富山』とはなにかを、「チーム富山」として考えていく。 以上